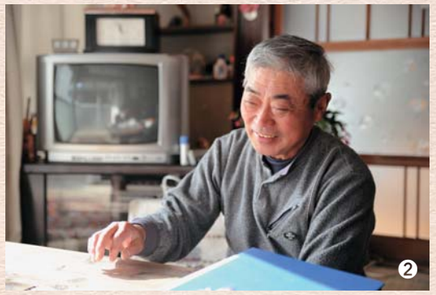
グリーン・ツーリズムで奥州の魅力を全国に発信

農業や自然に触れる機会の少ない都市部の生徒を受け入れ、民泊を通じて市の魅力を伝えるグリーン・ツーリズム。合併をきっかけに、地域間の連携が強まり、年々受け入れ数も増加しています。受け入れ窓口となっているおうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会（村上寛会長）の熱心な取り組みもあり、来年度の受入数は3000人の大台を突破する予定です。同協議会の村上会長に、取り組みとその魅力についてお話を伺いました。



❶生き生きとした笑顔から楽しさが伝わる
❷優しい表情で子どもたちからの寄せ書きをめくる村上さん
❸寄せ書きには、村上家で過ごした楽しい思い出がつづられている
❹妻のミヨ子さんと一緒に子どもたちと記念撮影
❺部屋にぎっしりと並んだ集合写真

合併をきっかけに県内一の農家民泊規模に

グリーン・ツーリズムの受け入れは、約20年前から始めました。年々、受け入れ数も増えており、わが家ではことし7校40人の受け入れを行いました。

受け入れでは、春は田植え、秋は稲刈り、それ以外はハウスの仕事など、その時にある仕事を体験させています。子どもたちを畑に連れて行けば、「これ何？これ何？」と質問攻めに。田んぼに連れて行けば競って「カエル捕り」といった具合になんでも目を輝かせるので、特別な仕事を用意する必要はないようです。ご飯も普段の食事を「おいしい、おいしい」と食べてくれます。わたしの家で受け入れる時はひめかゆ温泉には必ず連れて行くなど、地域の観光資源を生かした受け入れも大切だと感じています。

わが家では玄関を入ったら「家の子」と思って受け入れをしています。身の回りのことはなんでもさせますね。包丁を持たずに育った子も多いようですが、食材を渡し料理もさせますので、お母さんから感謝の手紙が届くこともあります。

グリーン・ツーリズムの魅力はやはり「出会い」。2泊3日でも、子どもたちはお別れの時は大泣きです。なかなか迎えのバスに乗らなくて、バスガイドさんがもらい泣きすることもあります（笑）。毎回、お別れしてからしばらくすると寂しくなってくるんですよ。

昨年の地震の際には、2年前に受け入れをした大田区立志茂田中の卒業生4人が夏休みを利用して、わざわざお見舞いにやってきてくれました。心配した子どもたちが夜行バスに乗って駆け付けてくれました。また、出産などの節目で連絡をくれ、家族同様の付き合いが続いている子も多いです。

受け入れた子どもは「食べたものがおいしかった」ということで、スーパーでも産地を見て選んで買ってくれることも多く、グリーン・ツーリズムは農産物の販売にもつながっています。

合併で奥州市になり、受け入れの懐が広がりました。おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会には、これまでの前沢・胆沢・衣川に、ことしから水沢と江刺も加わり、昨年から平泉町の組織とも協力し、受け入れ体制を整えています。民泊の受け入れ規模は県下一です。320人～330人規模の学校の受け入れにも対応できます。

ことし、初の受け入れを行った水沢の会員は「楽しかった。ことしは、新型インフルエンザの影響で消化不良に終わったので、来年からはもっといっぱいやりたい」と意欲的な声も多く聞こえてきます。

やはり受け入れには「安全・安心・ケガの無い」ことが一番大切なこと。「より安心して子どもたちを預けてもらえるよう」、協議会では、トラブルが起きた際の経験を「共有」し、救急講習会などの勉強会に取り組んでいこうと思っています。

●おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会長
村上　寛（ひろし）さん(68)
＝胆沢区南都田字独光＝

昭和17年生まれ。県立水沢農業高卒。稲作や花き、野菜などの栽培を手掛ける専業農家。妻・ミヨ子さん、息子夫婦、孫3人の7人家族